

# 困り感が見過ごされる可能性のある児童の早期発見

学籍番号 239213  
氏 名 橋詰 希  
主指導教員 牧 郁子  
副指導教員 柿 慶子

## 1. 研究背景と目的

文部科学省による「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(2023)」では、中学校1年生における不登校児童の急増が報告されている。少子化に伴い児童生徒数は減少傾向にあるにもかかわらず、小学校から中学校への移行期に不登校が増加していることは、家庭や地域の教育力の低下により小学校段階での問題が十分に解決されず、中学校で顕在化している可能性を示唆している(国立教育政策研究所, 2014)。すなわち、問題行動や不登校が中学校段階で顕著になるとしても、その基盤には小学校段階からの「困り感」が存在していると考えられる。さらに、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示す、いわゆる「グレーゾーン」の児童は小中学校において約8.8%存在する可能性が報告されている(文部科学省, 2023)。こうした児童は顕著な問題行動や学習困難がないために見過ごされやすく、支援が遅れることが少なくない。本研究は、小学校低学年段階において顕著な問題が認められないが、思春期以降に問題行動や不登校として顕在化する可能性のある「何か気になる児童」を早期にスクリーニングするためのチェックシートを作成することを目的とする。これにより、移行期における不登校や問題行動の予防に資することを目指すことを目的とした。

## 2. 実践研究

基本学校実習、発展課題実習で見えてきた課題から、教員が子どもを見る視点が共通理解されていないために、保護者からの不信感につながっている可能性があることがわかった。以上から、まず子どもの困り感への共通理解の必要性和、子どもの困り感を汲み取るポイントについて情報提供および情報交換を行い、チェックリスト作成のためのインタビュー調査の参考にした。R6, 7年度に赴任してきた教員の中から、担任の子どもへの見方に対して一貫性がないことに課題があるという話題があがった。具体的には保護者から、「前の先生は大丈夫だと思います、様子を見ましようと言われたのに、今年は問題行動が多いと言われるのはどうしてですか」と相談があったり、「本当に大丈夫ですか」と聞かれたりすることがこれまで勤務してきた学校より多いという意見が挙げられた。以上のことから、「アンテナを敏感に張る」と言った抽象的な言葉ではなく、より具体的な子どもの困り感の状態像の共通理解を図るために、当該研修を実施した。具体的には事前に作成していた見過ごされやすい子どもの困り感に関する

資料を提示したうえで、具体的な子どもの姿を意見聴取した。「ルールがわかっていない」という項目に対して、「自分が知っているルール以外のルールに合わせることができない」「遊びの中でルールが変わっていくことに対応できない」「暗黙の了解が分からずもめる」「給食の時間を守れない」「絵や工作になるとこだわって時間が守れない」が出た。「特定の言葉を聞いて勝手に不安になる」ではある言葉に引っかかり、不安なことを想像してパニックになる、パニックのなり方が年相応でない、パニックにならないように前もって予想していたことが起こったときに幼児のように泣いて周りが驚いてしまう。「単語で話す」「知らない」「分からない」「覚えていない」で自分の気持ちを誤魔化す項目では、嘘をついたり誤魔化したりしているようには感じない。言語化できない。語彙力が少ない。特に、言語化できないのではないかを言う話が多くでた。

以上の研修を通じた情報交換から、見過ごされやすい子どもの困り感および子どもの困り感を汲み取るポイントについて、教員間で一定の共通認識があることが認められた。

### 3. 総合考察

本実践課題研究は、実習校である A 小学校において、問題がないと認識されていた子どもが 4・5 年生で急に不登校になった、引き継ぎ資料には特記事項がなかった子どもが、実際には学習・対人関係などで課題が認められたことなどが散見されたことから、こうした子どもたちの困り感の予兆がもっと早期に発見できなかったのかという問題意識から始まった。また、教員間ではよく言われる「子どもを注意して見る」とは具体的にどのようなポイントに着目し、どのように対応することなのか疑問を感じていた。そこで、これまでの教員経験から培われてきた知識を言語化・明確化することで、様々な経験年数の教員が同じ視点で子どもを共通理解するためのツールを開発することを目的とすることにした。

基本学校実習・発展課題実習では、学習・対人関係等で顕著な問題はないが、困り感が認められる子どもたちを振り返り、チェックリスト化を行った。その結果、診断されるほどではないが何らかの特性が現れている可能性が示唆された。以上から、周囲の大人にその困り感を伝えられなかったり、見過ごされた結果、思春期以降に問題行動や不登校といった形で特性を顕在化させたりする子どもが一定数いることが考えられた。

この研究の課題と今後の方向性について述べる。まず、この研究は本来、作成したチェックリストを学校現場で活用し、その有効性を検証したうえで、実装する段階まで行う予定であった。しかし、実習校が勤務校であったこともあり、日々の教育実践を優先した結果、校内研修で情報提供や意見聴取する段階で終了したという経緯がある。校内研修では、困り感が見過ごされる可能性のある児童の早期発見の必要性を共有することができたが、実装化するためには実際のケースへの活用も行いながら、その有効性を検証する必要がある。さらに将来的には、実習校以外の学校での活用可能性を検討し、チェックリストの汎用性を検証する必要性もあると考える。